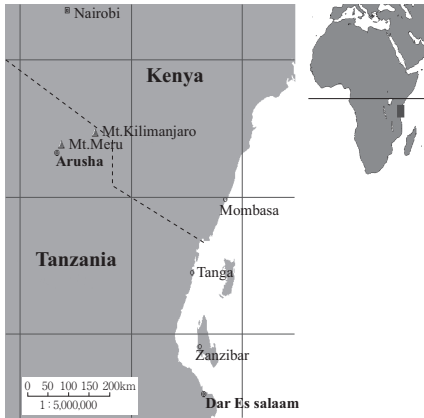


キリマンジャロ・バンツェ諸語における TA 標示形式とその変化についての覚書⁽¹⁾

品川大輔

1 導 入



地図1：タンザニア・ケニア国境

アフリカ大陸、赤道以南の広範な地域で話されるバンツェ諸語 (Bantu languages) は、言語系統上は、ニジェール・コンゴ語族 (Niger-Congo)、ベヌエ・コンゴ語派 (Benue-Congo) に分類される一大言語群で、総言語数は現状で約500と推定されている (ただし cf. Nurse and Philippson 2003: 4-5)。本稿が扱うところのキリマンジャロ・バン

- (1) 本論文は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同研究プロジェクト「言語接触と系統継承：大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツェ諸語と隣接言語の記述研究」研究会 (2009年11月) における筆者の発表「キリマンジャロ・バンツェ諸語における TA マーカーの分布と対応」の内容を、その後の調査で得られた成果を踏まえた形で発展させたものである。同研究会で有益なコメントを寄せてくださった方々に謝意を表す。論文中のルワ語およびシハ語のデータは、筆者の現地調査によって得られた一次資料による。調査協力者の Afitwa Abia Ayo 氏 (ルワ語)、Noah Kuvavenaeli Mmari 氏 (シハ語) に対して感謝の意を表すものである。シハ語の調査に関しては、科学研究費補助金 (基盤研究 B) 「スワヒリ語圏における超民族語と諸民族語の相克と均衡—言語文化的動態の記述研究を通して—」 (研究代表者：米田信子大阪大学准教授、課題番号 19401922) による援助を受けた。また本稿は、科学研究費補助金 (若手研究 B) 「未記述のキリマンジャロ・バンツェ諸語に関する横断的文法記述研究」 (研究代表者：品川大輔、課題番号 22720158) の成果の一部を成すものである。

ツ二諸語 (Kilimanjaro Bantu languages, 以下 KB)⁽²⁾ は、タンザニア北東部のキリマンジャロ山を中心に分布し、系統関係上の近親性が明らかで、かつ共時的にも多くの形式的特性を共有している言語群であり、伝統的にはチャガ語 (Chaga language(s)) の名で知られている。ただその一方で、それ全体が単一の言語と言えるような言語的均一性を有するわけではなく、少なくとも 10 を超える言語変種によって構成され、地理的に隔離した変種間では相互理解度 (intelligibility) が必ずしも確保されないほどの言語構造的多様性を見せている (cf. Nurse 2003 : 69)。すなわち、KB を構成する諸言語・方言は、いわゆる方言連続体 (dialect continuum) を形成しているのであるが³、その連続的な変異の在りようは、文の中核を構成する動詞の形態論的構造にも見出される。とりわけ、時制および相を標示する諸形式 (tense-aspect marker, 以下 TAM) の連鎖的な対応関係は顕著である。このことは、i) KB 諸語における TAM の多くが同一の共通 (語彙) 形式に遡りえて、ii) 各 TAM の概念変化のプロセスが、有機的な連関をもった文法変化の不可逆的な方向性 (cf. uni-directionality of grammaticalization) に従ったものであることを、形式面から明確に示すものである。ここでいう「TAM の連鎖的対応関係」とは、典型的には次のような例から確認される。

-
- (2) Philippson and Montlahuc (2003 : 475) は、Guthrie (1971) の Chaga group (E 60) に、E 74 の Dawida を加えた諸言語を KB としている。また同書が指摘するように、いわゆるガスリー分類における Chaga 内部の分類には、いくつか不正確ないし非整合的な点がある。
- (3) 本稿における両術語の定義は、一般的なそれ、例えば Comrie (1976 : 1-3) における定義に従う；時制=tense locates the time of a situation relative to the situation of the utterance, 相=aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation. この定義上の対立は、“event (situation) EXTERNAL time” vs. “event (situation) INTERNAL time” と端的にまとめることができる。

(1) *ke-* < **kal* (*d*)- ('sit, stay, remain etc.' cf. [Nur : 78])

a. Gweno (Gweno [P&N : 39]) ⁽⁴⁾	<i>á-ké</i> 3s-COP	<i>a-rítfa</i> 3s-run
‘he is running’		
b. Rwa (WK)	<i>a-keé-rishá</i> 3s-CONT-走る	
「彼(女)は走っている」		
c. Vunjo (CK [Mos : 145])	<i>N-á-kè-zriká</i> PROC-1 : SU-CTM-brew beer of wedding	<i>wári wò wólyí</i> ‘S/he [habitually/usually/often/sometimes] brews wedding beer.’

(1)に示した *ké-* (Gweno), *keé-* (Rwa), *kè-* (Vunjo) が, **kal* (*d*)-‘sit, stay, remain etc.’ (Nurse 1981 : 158) に由来する形式であることは, 引用した各先行研究に示されているとおり十分確証に足る。そしてこれら同根形式が, グェノ語(以下 Gwe.)では「コピュラ (COP)」および分析的な構文(“two-word verb constructions” [P&N : 39])における進行相 (CONTinuous)⁽⁵⁾ 標示(補)助動詞として, ルワ語 (Rwa.)では接辞化した形で同様に進行相として, さらにヴンジョ語 (Vun.)においては習慣相 (HABitual) マーカーとして, それぞれ機

(4) 例文が先行研究の引用である場合は, 「言語名 (小語群 [引用文献 : 頁数])」の形でその出典を明示する。引用文献略号は表 1 を参照。これら資料からの例文は基本的にそのまま (加工, 修正せず) 引用するが, [Mos] に関しては, 必要に応じて第一 TAM と第二 TAM を分離して表記した (cf. 3.1.2)。それによって, 対応するグロスが原典とは異なっている箇所がある。

(5) <Gweno> Gweno has many **two-word verb constructions in which the first word is clearly** (in some cases) or possibly (in others) **a form of the copula** [P&N : 39]. There is also a **locative copula /-ke/, probably derived from /-ikee/, the perfect form of /-ikaa/** ‘sit, stay’ [P&N : 38]. <Vunjo> The aspectuals under consideration are: *wa* ‘be’, *kaa* ‘be/ stay’, *enda* ‘go’, *ca* ‘come’, *maa* ‘finish’. ... when they combine with the primary time marker *i*, the resulting forms are *we* (*wa + i*), *ke* (*kaa + i*), *nde* (*enda + i*), and *ce* (*ca + i*) [Mos : 142] (強調部は筆者による)。また以下にも触れるとおり, [Mos] の分析には, 一部整合性を欠くように (少なくとも筆者には) 思われる点がある。

(6) 同様の意味合いを示す術語として PROGRESSIVE があるが, Nurse et al. (2003 : 21) に指摘があるように, しばしば両者は類義の用語として用いられている。厳密には, PROGRESSIVE は「動作動詞における行為の段階的変遷 (の進行)」といった, より限定的な意味合いで用いられることが一般的である (cf. Comrie 1976 : 12)。ここでは, その意味での PROGRESSIVE を含んだものとして, CONTINUOUS を代表させて用いる。

能しているわけである。そして、これら諸概念の間に有機的な概念的連関があることは、昨今の文化化研究において夙に指摘されているところである。

(2)

a. COP (および CONT, HAB) の語彙的起源 (lexical source) としての‘sit’

▶SIT (‘to sit’, ‘to stay’) >COPULA

Not infrequently, verbs meaning ‘sit’ have some copula-like uses in certain contexts.

▶SIT (‘to sit’, ‘to stay’) >HABITUAL

SIT-verbs may give rise to CONTINUOUS markers, which again may further develop into HABITUAL markers.

(Heine and Kuteva 2002 : 278)

b. CONT の派生源としての COP

▶Copulas in fact form the most common source of progressive, incompletive aspects of African languages.

(Heine and Reh 1984 : 122)

c. CONT から HAB へ の概念変化

▶The future/habitual polysemy is easily explained diachronically if the gram is used to be a present tense : **A typical present has both progressive and habitual uses**, and very often it can also be used for future time reference.

(Haspelmath 1998 : 48, 強調は筆者による)

▶Conceivably, CONTINUOUS markers may constitute an intermediate stage on the way from verb to habitual marker...

(Heine and Kuteva 2002 : 93)

このような TAM の連鎖的対応関係を、網羅的 (各言語の TA 体系を構成する TAM を遺漏なく記述する) かつ横断的 (可能な限り広範な言語を分析の対象とする) に分析することによって、KB 諸語の言語動態の一端—とりわけその文化化プロセス—を実証的な形で明らかにすることが期待できる。本稿はこのような構想に基づいて、すでに公開されている先行研究ならびに記述資料と、筆者の現地調査によって得られた一次資料を整理し、今後の KB 諸語の文法記述研究ならびに言語動態論的研究の足がかりを確立することを目的とするものである。

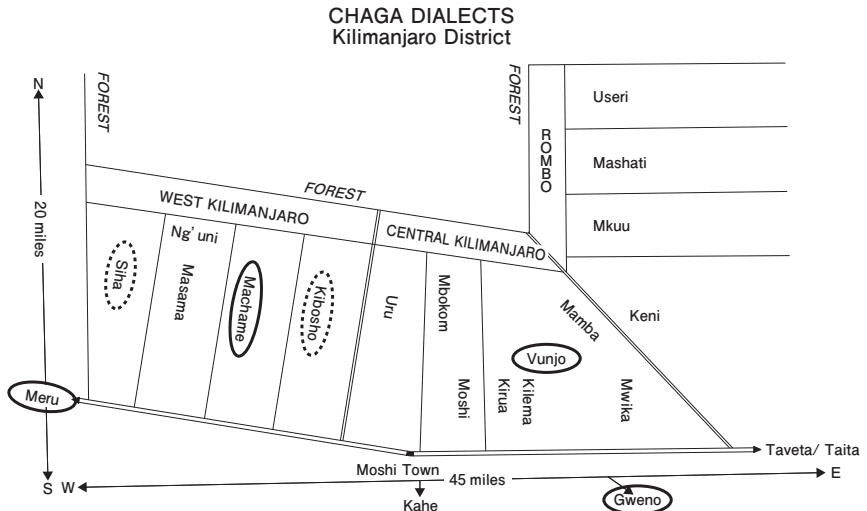
2 対象資料概要

上述の観点における KB 諸語の TA 研究の先駆けに位置づけられるのが Nurse (2003 a) である。ただし同論文が重点的に扱っているのは、ヴンジョ語と(補足的に)グエノ語であり、西キリマンジャロ小語群 (WK) についての言及は限定的である。このことは、この時点において WK の TA 体系に関する公刊された記述資料が乏しかったということに因るが (cf. *ibid.* : 69, 75), 近年, ルワ語の動詞形態論に関する記述 (拙稿, 品川 2008, Shinagawa 2008, 2009) やマシャミ語 (Mashami, Machame とも, Mas.) の reference grammar (Rugemalira and Phaniel 2009) が著され⁽⁷⁾, 研究の射程が拡張されつつある。これらの新資料を含め, 本稿で参照する資料を表 1 に示す (下線は引用資料)。各言語の地理的分布については地図 2 を参照されたい (点線で示したものは, 現段階で得られた資料が限定的であることを示す)。

表 1：参照資料出典一覧

小語群	言語名	資料
Central Kilimanjaro (CK)	Vunjo (E 62 b) [Vun.]	<u>Moshi (1994) = [Mos]</u> , Nurse (2003 a)
	Moshi / Moci (E 62 a)	= [Nur], Raum (1909)
West Kilimanjaro (WK)	Rwa (E 61) [Rwa.]	<u>品川 (2008)</u> , Shinagawa (2008, 2009)
	Siha [Sih.]	<u>品川 (調査ノート)</u>
	Mashami (E 62 a)	<u>Rugemalira and Phaniel (2009) = [Rug]</u> ,
	[Mas.]	Yukawa (1989)
	Kibosho [Kib.]	加賀谷 (1989) = [Kag]
Gweno	Gweno [Gwe.]	<u>Philippon and Nurse (2000) = [P&N]</u>
(Dawida/ Taita)	Dawida (E 74)	Philippon and Montlahuc (2003)

(7) 筆頭著者の Rugemalira 氏によると, これは現時点では草稿段階であるが, 現在編集作業中であり近く公刊の予定とのことである (私信, 2009 年 11 月)。



地図 2 : キリマンジャロ・バンツワ諸語の分布
(出典 : Nurse 1981 : 128)

3 データと分析

3.1 導 入

3.1.1 動詞の形態論的構造

KB における一般的な動詞構造を、本稿の論旨に支障を及ぼさない程度に簡略化して示せば、(3)のように一般化しうる。

(3)

(PROC-) SM- TAMⁿ- (OMⁿ-) Stem -Suffixⁿ (-ENC)

必須要素は主語接頭辞 (SM), TA マーカー (TAM), 動詞語幹 (Stem), 屈折接尾辞 (Suffix) であり、このうち TAM と Suffix が TA 標示にかかわる形式である。この両者および目的語接辞(OM)は、複数の形式を並列させうる(“n”で表示)。構造の両端に位置する倚辞には前倚辞 (PROC) と後倚辞 (ENC) が立ちうるが、KB においては一般にフォーカスマーカーとされるコピュラ起源

の PROC (e. g. (6 d) Vun. の *N-*) の存在がよく知られている。⁽⁸⁾

3.1.2 TAM と屈折接尾辞 (群)

TA 表示にかかわる TAM と屈折接尾辞について、補足的な説明を加える。両者はさらに次のような下位構造をなす ((4)=TAM, (5)=屈折接尾辞)。

(4)

SM-	TAM ^a	-(OM ^b -) Stem
Primary [tense] marker	(Secondary [aspect] marker)	
<i>a₁-, a₂-, i-, e-, le-</i>	<i>m-/ maa-, ke-, ci-, nde-, ce-</i>	

TAM が複数並置される場合、その配列パターンは一定の辞順に従う。例えば Rwa; *N'-a-i-M'-maa-loli-á-a* 「私は (過去の基準時点までに) 見てしまっていた (過去完了)」においては、*a-*, *i-*, *M'-*, *maa-* の 4 つの TAM が、この辞順で共起している (それ以外の辞順は許容されない)。このとき、最初頭に現れる *a-* はそれのみで定動詞としての形式を成立させる (cf. *N'-a-lóli-a* 「私は見た (近過去)」) のに対し、それに後続して現れる *M'-* および *maa-* は、単独で生じることはない (i. e., **N'-M'-loli-a*, **N'-maa-loli-a*)⁽⁹⁾。すなわち、前者は形式を成立させる上で必須のマーカであるが、後者は前者とともに現れて、付加的に時間表現を精緻化する働きをなす。このような構造上の特性を踏まえ、[Mos : 129] は前者を “primary” time markers と呼び、前者と後者を組み合わせた形式を “compound” time markers (CTM) と呼んでいる。本稿では、“compound” time markers の後者部分を “secondary” markers と見做し、前者を「第一 TAM」、後者を「第二 TAM」と言及する。以下に見るとおり、KB 一般において第一

(8) ただ、すべての KB において画一的に現れるわけではない (たとえばルワ語における該当要素 *N-* は倚辞と言うには形式的な自立性が高い)。そして、各言語におけるこの形式の正確な標示概念についても (筆者は) 十分に把握していないため、以下の具体例におけるグロスには単に PROC と示す。

(9) Rwa の *i-* は、構造的にも、表示概念上も、両者の中間に位置づけられるようなふるまいをするが、本稿では他言語との対照のための便宜も踏まえ、第一 TAM に位置づける。

TAMはいわゆる時制概念を、第二TAMはアスペクト概念に相当する機能を標示する大まかな傾向性が認められる (cf. [Nur : 77])。

次に本稿で派生接尾辞としているものを整理しておく。これは構造上3つのスロットを立て得て、形式上義務的なものは末尾辞 (あるいは終母音, Final vowel, F) のみであり, 具体的には **-a* (INDicative 直接法 “default”), **-é* (SUBJunctive 接続法), **-ile* (ANTerior 完了相 cf. 3.3.2) の対応形が該当する。これらに加え, 言語によっては前末尾辞 (Pre-Final, Pref) および後末尾辞 (Post-Final, PosF) を付随的に取ることがある。

(5)

Stem-	Suffix ^a	
	(Pre-Final)	Final vowel
<i>-a</i> (< <i>*-ag</i>)	<i>-a, -ie, -e</i>	<i>-VC</i>

通時的には, 前末尾辞はバンツー祖語 **-ag* (現行のバンツー諸語においては習慣相, あるいはより広範な未完了相ないし部分相 (ImPerFectiVe) の諸形式に広く対応, バンツー祖語段階における標示概念は不詳, cf. Meeussen (1967 : 110)⁽¹⁰⁾) の対応形であり, これは WK のみに認められる (Philippson and Montlahuc 2003 : 495)。また後末尾辞に関しては, 把握している限りではルワ語およびシハ語にのみ認められ, 形式上は末尾辞最終母音をコピーした母音 (Vowel Copy, VC) である。これに関しては 3.4.3 で扱う。

3.1.3 分析対象⁽¹¹⁾

KB 一般的な傾向として, 第一TAM (3.2) は形式的にもまた標示機能の面

(10) An element *-ag-* (and variant *-ang-?*) is largely attested; its meaning, ranging from <imperfective> to <repetitive> or <habitual> (Meeussen 1967 : 110). また近年の **-ag* に関する議論として; Sometimes it is even claimed that *-ag*, though a single morpheme element, displays a set of totally unrelated grammatical meanings and cannot be considered as an imperfect marker any more (cf. [Leitch 1994] about Babole, quoted from Plungian and Urmanchieva 2007).

でも相対的に変異が小さいため、以下の議論では主に第二 TAM (3.3) を中心に論じる。屈折接尾辞については、“default”の末尾辞 *-a* を除く、前末尾辞 *-a* (3.4.1)、末尾辞 *-ie* (3.4.2)、そして後末尾辞 (3.4.3) の順に扱う。

3.2 第一 TAM

構造上 SM に近い位置、すなわち相対的に共起する他の TAM に先行する位置に現れ、時制概念標示を担うという一般的傾向を有する第一 TAM について、以下に記述資料を提示していく。

3.2.1 a_1 -, a_2 -

まず、本稿で分析対象とするすべての言語に認められる第一 TAM の a -⁽¹³⁾ について概観する。

-
- (11) 接続法 (SUBJunctive, *-é*) や継起相 (CONSEcutive, *ka-*) といった従属的な動詞形式、関係節、さらには否定形なども、TA 体系の全体を明らかにするうえでは等閑視できない項目ではあるが、有意義な対照を行うだけの資料が得られていないため、本稿では対象から除外する。ただし、KB 一般において否定は、関係節や接続法等を除いて、肯定形に不変化詞を後続させることによって分析的に表示し、「否定+TA 概念」を一体として表示する形式は少なくとも一般的ではない。
- (12) また、バンツール諸語における TA 形式の分析は、“TAM-/-Suffix”の組み合わせ全体を対象に行うのが伝統的また一般的な方法である。これは、両形式の組み合わせによって表示される TA 概念を、構成的 (compositional) に捉えられない (TAM および Suffix の形式の意味の総和としてだけでは正確に捉えられない) 場合があることを考えれば当然のことである。この点について筆者も承知しているが、本稿ではとりわけ第二 TAM の KB 諸語間の機能対応に焦点を絞るため、まず TAM および Suffix の形式「そのもの」の標示概念に注目して論を進める。また次の Nurse (1981 : 156) も参照 ; In general, tense / aspect/ mood are indicated in Bantu languages by a combination of TA [=TAM] and suffix acting together. ... Chaga and Sabaki have tended to move away from joint use of suffix and TM, and have emphasized the role of TM. (=本稿における TAM)
- (13) 現行のバンツール諸語全体を眺めてみてもきわめて一般的な形式であると言える。バンツール語地域全域からのデータを基に、その TA 体系の全体像を明らかにした Nurse (2008) によれば、全 (基本) データ 100 言語中 84 の言語が何らかの形でこの形式を用いており、うち 78 言語が過去 (時制) に関連する TA 概念を表しているとする (ibid : 82)。

(6) *a*₁-, PST. N

a. Rwa. (WK)	<i>t-a-lóli-a</i> 1p-PST. N-見る-F 「私たちは見た (今日)」
b. Mas. (WK, [Rug : 29])	<i>n-lu-á-many-a</i> PROC-1p-PST. N-know-F ‘we knew’
c. Kib. (WK, [Kag : 829])	<i>ŋ-l-o-ch-a</i> (<i>l-o- < lu-a-</i>) PROC-1p-PST. N-着く-F 「私たちは着いた」
d. Vun. (CK, [Mos : 136])	<i>N-á-á-ʹwüká</i> <i>íhǎ ʹínǔ ngǎmè-nyì</i> PROC-3 : SU-PST. N-leave here today morning-LOC ‘S/he left here this morning.’ cf. * <i>N-á-á-ʹwüká</i> <i>íhǎ úkòù</i> PROC-2 : SU-PST. N-leave here yesterday ‘S/he left here yesterday.’

(6 a-d) に示したものはすべて近過去時制 (PST. N, [Nur] 等における “P₁”) を標示する例であり、シハ語を除く対象言語のすべてがこの機能を有する。一方、同じ *a*- という形式でありながら (動詞全体として) 音調が異なるもの (便宜的に *a*₂- とする) をも認める言語もあり、これは3段階の過去を持つ言語における遠過去時制 (PST. R, [Nur] 等における “P₃”) を表す。興味深いことに、*a*₁- を欠くシハ語には、*a*₂- のみが認められる。

(7) *a*₂-, PST. R

a. Rwa. (WK)	<i>ti-a-lóli-á</i> 1p-PST. R-見る-F 「私たちは見た (ずっと以前に)」
b. Sih. (WK)	<i>n-a-má!ny-á</i> 1s-PST. R-知る-F 「私たちは知った (ずっと以前に)」

過去時制に3段階の区分を有する言語は、ルワ語、マシャミ語、シハ語など

いずれも WK の言語である⁽¹⁴⁾。ただしマシャミ語における遠過去は、*e-* で標示される (cf. 3.2.2)。

3.2.2 *i-*, *e-*

ヴンジョ語 (を含む CK) では、*i-* が、一般的な意味での現在進行相ないし近未来時制 (例中のグロスでは、便宜的に CONT と表示) を表す⁽¹⁵⁾ (8 a-b)。一方、同形式の *i-* が、ルワ語では「部分相諸形の過去時制 (Past Imperfective, P. I.)」を標示するマーカーとして用いられている (8 c)。

(8) *i-* (<*-*li-* 'be', cf. [Nur : 77])

a. Vun.	<i>Mkà n-ǎ-ĩ-shóóngà</i> (<i>ulálu</i>)
(CK, [Mos : 132])	1: wife PROC-1: SU-CONT-jump now 'The wife is jumping [definite].'
b. Vun.	<i>Màngì n-ǎ-ĩ-cà inu/ngámǎ/*máká</i> ↓ <i>có ò-câ</i>
(CK, [Mos : 135])	1: chief PROC-1: SU-CONT-come today/ tomorrow/ *year that it-come 'The chief will come [is coming] today/ tomorrow/ *next year.' cf. <i>Màngì n-ě-ě'cĩ-cǎ ngámǎ/*inú/*máká</i> ↓ <i>có ò-câ</i> 1: chief PROC-1: SU-FUT.N-come tomorrow/ *today/ *year that it-come 'The chief will come tomorrow/ *today/ *next year.'
c. Rwa.	<i>ti-ĩ-keé-loli-a</i>
(WK)	1p-P. I-CONT-見る-F 「私たちは見ていた」

(14) [Nur : 87] は、それ以外にグニ語 (Ng'uni) にも過去時制の 3 対立を認めている。

(15) [Mos : 128] は、TA 概念の分類のために i) 発話時 (speech time), ii) 事態発生時 (event time), 参照点 (reference point) という 3 基準を立て、*i-* (および後述の *keri-*) の標示概念について、次のように述べている; Both *i* and *keri*, which denotes the IMPERFECTIVE, are used to describe an event whose event time and reference point coincide with speech time. When *i* or *keri* are used, there is an understanding that the concept of 'now' includes extended stretches of time encompassing the actual speech time ([Nur : 75] という "present-used-as-future")。また、[Nur : 77] も参照; The only marking in the Present is *-i-*, which is thus an aspect used as a tense. In Vunjo, in many Chaga dialects, and in many other languages, this (Present) Progressive can also refer to events in the near future.

すなわち (8c) は、進行相を表す *keé-* における過去時制概念を *i-* が示していると解釈されるが、これと同様の機能は、キボシヨ語では *e-* が担っている (9a)。一方 [Rug] によれば、マシャミ語においては、*e-* は遠過去を標示するようであるが (9b), P. I. に対応するようにも見える例がある (9c)。また, [Nur : 77-80] が「変則的 (“anomalous”）」としている *we-* という形式は、概ねここでいう P. I. に対応すると推定される⁽¹⁶⁾。

(9) *e-*

a. Kib.	<i>n-lu-e-som-aa</i>
(WK, [Kag : 829])	PROC-1p-P. I.??-読む-PRS/CONT 「私たちは読んでいた」
b. Mas.	<i>n-lú-é-ké-many-a</i>
(WK, [Rug : 34])	PROC-1p-PST. R?/P. I.-CONT-know-F ‘we were understanding/ tulikuwa tunaelewa’
c. Mas.	<i>n-lu-é-mány-a</i>
(WK, [Rug : 34])	PROC-1p-PST. R-know-F ‘we knew’

また、少なくとも分節素レベルでは同形式である *e-* は、ヴンジョ語においては遠未来 (FUT. R) を標示するようであるが、[Mos : 139-140] は、接続法の *-é* との形式的、概念的関連を示唆している⁽¹⁷⁾。

(10) *e-*, FUT. R < SUBJ??

Vun.	<i>Màngì n-ǎ-é-álikà màká /cò ò-cá/ *inú/ *ngàmǎ/</i>
(CK, [Mos : 135])	1 : chief PROC-1 : SU-FUT. R-marry year that it-come/ *today/ *tomorrow/ ‘The chief will marry next year/ *today/ *tomorrow.’

(16) In Vunjo this *we* occurs first in any string, although it does not mark tense, and it replaces regular past tense markers in some combinations of past and aspect. This behavior of *we* is paralleled across Chaga, where it is associated predominantly with forms referring to past and/ or imperfective (i.e., progressive, habitual, or continuous).

3.2.3 *le-*, *nde-*

a- とともに、KB 一般に広く認められる過去時制マーカーとして *le-* (およびそれに音韻論的に対応する形式) があげられる。その標示機能は、過去に 3 対立を有する言語 (11 a-c) における中過去, 2 対立の言語 (11 e-f) における遠過去に相当する ([Nur] 等における “P₂”)。ただし, *-a*₁ を欠くシハ語 (11

(11) *le-*, *nde-*, PST. M/R

a.	Gwe.	<i>ni-lé-yend-ie</i>	
	(Gweno, [P&N : 19])	1s-PST. R-go-PST	‘I went’
⁽¹⁸⁾	b.	Rwa.	<i>ti-Nde-loli-a</i>
	(WK)	1p-PST. M-見る-F	「私たちは見た」
c.	Mas.	<i>n-lú-le-mány-a</i>	
	(WK, [Rug : 29])	PROC-1p-PST. M-know-F	‘we knew’
d.	Sih.	<i>va-lé-many-a</i>	
	(WK)	3p-PST. N-知る-F	「私たちは知った」
e.	Kib.	<i>ŋ-lu-le-ch-a</i>	
	(WK, [Kag : 829])	PROC-1p-PST. R-着く-F	「私たちは着いた」
f.	Vun.	<i>N-ā-[↓]lé-wúká</i>	<i>ihā ūkōū</i>
	(CK, [Mos : 136])	PROC-2 : SU-PST. R-leave here yesterday	‘S/he left here yesterday.’
		cf. * <i>N-ā-[↓]lé-wúká</i>	<i>ihā [↓]inū ngāmè-nŷi</i>
		PROC-2 : SU-PST. R-leave here today morning-LOC	‘S/he left here this morning.’

- (17) These characteristics of the subjunctive *e* time marker identifies it with the futurate *e* time marker and clearly distinguishes it from *ie*. It is plausible, therefore, to consider the subjunctive *e* and the future marker *e* to be semantically similar and only distinguished by their morphosyntactic positions on the verbal group.

d) においては、*le-* が近過去標示を担う。さらに同言語では、*le-* とともに PosF のコピー母音 (VC) が用いられると、中過去形となる (cf. 3.4.3)

3.3 第二 TAM

共起する第一 TAM に後続して現れ、全体的にアスペクト (ないしモダリティー) 概念の標示にかかわるという傾向を見せる第二 TAM について論じる。第二 TAM 諸形式は、[Nur : 73-74] 等に指摘があるように、通時的には文法形式として成立して以降の時間的経過が短いと考えられ、したがって文法化以前の起源となる語彙形式との対応関係を、比較的明確に辿ることができるものである。

3.3.1 *nde-*, *ce-*

ルワ語およびヴンジョ語において、事態の実現可能性にかかる一種のモダリティー概念を標示する TAM のあることが報告されている ([Mos], [Nur], 品川 2008 等)。*nde-* は、バンツー祖語 **-yend-* 「行く」に由来する形式であり、*ce-* (Vun.) / *she-* (Rwa.) は、同様に **-ja-* 「来る」に由来する形式である。

(12) *nde-* (< **-yend-*, cf. Nurse 1981, 158), INT ↓

a. Rwa. (WK)	<i>ti-ndé-loli-áa</i> 1p-INT ↓ -見る-FUT 「私たちは見ることになるだろう／かもしれない」
b. Vun. (CK, [Mos : 146])	<i>Mšúlrí n-ǎ-í-ndé-zriká</i> ↓ <i>wári</i> 1 : nobleman PROC-1 : SU-CONT-INT ↓ -brew 11 : beer ‘The nobleman is expected to brew the beer [soon].’
c. Vun. (CK, [Mos : 146])	<i>Mšúlrí n-ǎ-↓cí-ndé-zrèzrà</i> 1 : nobleman PROC-1 : SU-FUT. N-INT ↓ -speak ‘[We know that] the nobleman intends to speak.’

(18) ルワ語の *Nde-* における /N/ (の起源) については不明。ただし、音韻論的に /N/ に後続する /l/ が /d/ に交替すること自体は妥当。

(12)に示したとおり, *nde-* 形式はいずれの言語においても「弱い意図性」ないし「(客観的状況から?) 事態が成立することが予測される」といったモダリティー概念を示すようである。一方で **-ja-* に由来する形式に関しては, 「確実に事態を成立させる/事態が成立する」という「強い意図性」ないし「確実性の高い予測」といった意味合いを認めることができる。ただし, これら形式に関しては, 資料によって, あるいは接合する動詞の種類等といった要因によって, 話者の意味解釈が大幅に異なることがあるため, この形式が標示する概念の精確な記述が必要である⁽¹⁹⁾。また, ルワ語およびヴンジョ語における両形式は, 組み合わせられる時制概念が必ずしも未来に限定されるわけではない((13 b-c) を比較, また cf. [Nur : 87])。

(13) *ce-* (< **-ja-*, cf. Nurse 1981, 157), INT ↑

a. Rwa. (WK)	<i>ti-shé-loli-áa</i> 1p-INT ↑-見る-FUT 「私たちはきっと見るだろう」
b. Vun. (CK, [Mos : 148])	<i>Mšúlrí n-ǎ-í-cè-zrèzrà</i> 1: nobleman PROC-1: SU-CONT-INT ↑-speak ‘The nobleman [definitely] intends to speak [immediately].’
c. Vun. (CK, [Mos : 148])	<i>Mšúlrí n-ě-í-cí-cè-zrèzrà</i> 1: nobleman PROC-1: SU-FUT.N-INT ↑-speak ‘The nobleman [definitely] intends to speak [sometime soon].’
d. Gwe. (Gweno, [P&N : 39])	<i>fw-atfe-yua maru yú</i> 1p-FUT. R.-buy banana ‘we will buy bananas (some day).’

また (13 d) に示したとおり, [P&N] によれば, グエノ語における **-ja-* に由来する TAM *-a(-)tfe-* は, 遠未来を標示する。これはルワ語やヴンジョ語に

(19) 例えば [Nur] においては, *nde-* を “Intend to (Less Definite)”, *ce-* を “Intend to (Definite)” として, (12), (13) の意味記述とはほとんど真逆の解釈を示している。また筆者による現地調査においても, 調査協力者が両形式の意味解釈を混同したりすることがよくある。これは, ともすると, そもそもここで想定しているようなモダリティー概念とは, 本質的に別種概念を表しているから, かもしれない。

比して文法化段階がさらに進んだ用法と見做すことができよう。

3.3.2 *m-/ maa-*

語彙形式 **-mad-* 「終える」に由来する第二 TAM *m-* は、WK (14 b-c) では、一般的な意味での完了相 (PERFect/ ANTERior) を標示する。一方で [Nur : 78] によれば、ヴンジョ語における完了相は、接尾辞 *-ie* によって標示されるとい

(14) *m-* (<**-mad-*, cf. [Nur : 79]), PERF ~ ANT

a. Gwe. (Gweno, [P&N : 39])	<i>ɲumbe yakwa i-ndé. (m (i))-pɸwá</i> cow my 9-PERF-die 'my cow has died'
b. Rwa. (WK)	<i>ti-a-M-loli-a</i> 1p-PST. N-PERF-見る-F 「私たちは見た (完了) /tumeona」 cf. <i>ti-a-í-M-loli-á-a</i> 1p-PST. N-P. I-PERF-見る-F-PosF 「私たちは見てしまっていた (完了) /tulikuwa tumeona」
c. Mas. (WK, [Rug : 29])	<i>n-lu-á-m-many-a</i> PROC-1p-PST.N-PERF-know-F 'we have already known' cf. -1 <i>n-lú-lé-m-many-a</i> PROC-1p-PST. M-PERF-know-F 'we have (ever) known/ tumewahi kujua' cf. -2 <i>n-lú-é-m-many-a</i> PROC-1p-PST. R-PERF-know-F 'we had known'
d. Vun. (CK, [Mos : 150])	<i>Wásòlrò wá-á-m-cá ùlálù/ inù/ *ùkòù</i> 2 : man 2 : SU-PST. N-COMP-come now/ today/ *yesterday 'The man have come/ arrived now/ today/ *yesterday.' cf. <i>Wásòlrò wá-lé-m-cá *ùlálù/ *inù/ ùkòù</i> 2 : man 2 : SU-PST. R-COMP-come *now/ *today/ yesterday 'The man came *now/ *today/ yesterday.'

う (cf. 3.4.2)。ではヴンジョ語における *m-* の標示機能はといえば、「基準時点 (= 関連する事態の事態発生時) までにその行為が終わってしまっている」という完結相 (COMPLETIVE, [Nur : 78]⁽²⁰⁾) に相当するようである ((14 d), cf. [Mos : 149-150])。

WK における完結相は *m-* に、同様に **-mad-* から文法化した形式 *maa-* を後続させる構造をとる。このとき、ルワ語 (15 a) では *maa-* が接辞化していると見做しうるが、マシャミ語 (15 b) においては後続要素が不定詞形をとっていることから、語彙的な性質を残している (補助動詞的なステータスである) ことが形式的に確認される。

(15) *maa-* (< **-mad-*, cf. [Nur : 79])

a. Rwa.	<i>ti-a-M-maa-loli-a</i>
(WK)	1p-PST. N-PERF-COMP-見る-F 「私たちは見終わった (完了) / <i>tumshaona</i> 」
b. Mas.	<i>ni-shi-á-m-maa i-ghém-á</i>
(WK, [Rug : 32])	PROC-1s-PST. N-PERF- finish INF-cultivate-F 'I have already cultivated/ <i>nimeshamaliza kulima</i> '

いずれにせよ、成立時期がさほど古くに遡らないと考えられる第二 TAM に、同一起源の要素が2つ並存するという状況は、共時体系としても、文法変化のあり方としても自然さを欠く印象を否めない。この問題については、4.2 において再び言及することになる。

3.3.3 *ke-/keri-*

**-kal(d)-* 「座 (ついで) する」に由来する形式は、(1) で見たとおり、ゲエノ語において補助動詞的な進行相マーカー、WK で TAM としての進行相マーカー、

(20) Completive [= *m-*] represents an action or event that took place prior to the present and is felt in some way to be definitely finished and not repeatable. そして、この *m-* をスワヒリ語における *sha-* に相当するものと捉えているが、ルワ語においては、その機能は概ね *maa-* のそれに対応する。

そして、ヴンジョ語では習慣相マーカーとして機能している(16)。ヴンジョ語において *ke-* が習慣相マーカーとして機能していることは、当該言語に **-ag* が継承されなかった事実を起点とした、体系の連鎖的変化の結果として説明される (cf. 3.4.1)。これについては、4.1 で詳述する。

(16) cf. (1)

a. Gwe. (Gweno, [P&N : 39])	<i>á-ké</i> <i>a-rítfa</i> 3s-COP 3s-run 'he is running' cf. -1 <i>n-fw-á-yua</i> <i>ń-1p-PRS-buy</i> 'we are buying' cf. -2 <i>fu-kyá-yenda</i> 1p-CONT-go 'We are going'
b. Rwa. (WK)	<i>a-keé-rishá</i> 3s-CONT-run 「彼(女)は走っている」
c. Mas. (WK, [Rug : 29])	<i>n-lú-ké-many-a</i> PROC-1p-CONT-know-F 'we are knowing' [sic.]
d. Vun. (CK, [Mos : 145])	<i>N-á-kè-zriká</i> <i>wàri wò wólyĩ</i> PROC-1 : SU-HAB-brew beer of wedding 'S/he [habitually/usually/often/sometimes] brews wedding beer.'

ヴンジョ語の *ke-* について [Mos : 145] は、*kaa-* に第一 TAM の *i-* が後続したものと記述しているが、構造的な位置取りからは、むしろ不定詞(動名詞)化させるクラス5 接頭辞 *i-* との結合と見るのが整合的であると考えられる (cf. [Nur : 70, 77], また 3.1.2)。またヴンジョ語の進行相標示には、前述 (3.2.2) の *i-* とともに、*keri-* という形式がある。[Mos : 132] はこれも第一 TAM と見ているが、これは *kaa* に屈折接尾辞 *-ire* (= "the STATIVE marker" [ibid : 140]) が後続した形式に由来する可能性がある (cf. [ibid. : 138])。で

あるとすれば、それはルワ語の *kee-* と形態論的にも、概念的にも類似の形式ということになる。

(17) *keri-*, CONT

Vun.	<i>Mšũlrĩ</i>	<i>n-ǎ-kě'ri-shòóngà</i>	(<i>ùlálũ</i>)
(CK, [Mos : 132])	1 :	nobleman PROC-1 :	SU-CONT-jump (now)
			'The nobleman is jumping (assumed).'

3.3.4 *ci-*

ヴンジョ語を含む CK において、'know' に相当する語彙形式 (Vun. *ci*) に由来する TAM が未来時制 ((N.) FUT) を標示することはよく知られている (18 a, cf. [Nur : 76])。一方で、グェノ語における対応形式 *tʃi-* は、習慣相マーカーとして機能する⁽²¹⁾。この事実は WK における屈折接尾辞群 *-a-a* のふるまいと併せて考えるとき示唆的である (cf. 3.4.1)。未来時制と習慣相 (さらに進行相) と間の連鎖的対応関係については、4.1 で論ずる。

(18) HAB/ FUT. M

a. Vun.	<i>Mšũlrĩ</i>	<i>n-ǎ-ĩ-ci-zrèzrà</i>
(CK, [Mos : 145])	1 :	nobleman PROC-1 :
		SU-CONT-FUT. N-speak
		'The nobleman will [definitely] speak [sometime in the distant future].'

b. Gwe.	<i>ikéró</i>	<i>ni-tʃi-yenda fúlé ...</i>
(Gweno, [P&N : 26])	in the morning	1s-HAB-go school
		'in the morning I go to school...'

(21) 'know' が HAB の語彙的起源であることは、Bybee (1994 : 154), Heine and Kuteva (2002 : 186-188) 等に言及があるとおり、通言語的に認められる現象であるといつてよい。

3.4 屈折接尾辞（群）

KBにおける基本動詞構造（cf.(3)）における動詞末位置のスロットを充填する要素である屈折接尾辞群について記述していく。

3.4.1 -a-a

直説法（“default”）の末尾辞 *-a* に **-ag* (cf.3.1.2) の対応形を起源とする前末尾辞が前接した形式が *-a-a* である。**-ag* を継承する多くの現行のバンツール諸語同様（Nurse 2003 b : 98），習慣相を標示する。ただし KB において **-ag* の対応形を継承しているのは WK のみである（Philippson and Montlahuc 2003 : 495）。

(19) HAB

a.	Rwa.	<i>ti-loli-áá</i>
	(WK)	1p-見る- HAB 「私たちは（いつも）見ている」 cf. <i>ti-i-loli-áá</i> 1p-P. I. -見る- HAB 「私たちは（いつも）見ていた」

b.	Mas.	<i>n-lú-many-aa</i>
	(WK, [Rug : 29-30])	PROC-1p-know- HAB ‘we know’ cf. <i>n-lu-e-many-aa</i> PROC-1p-PST. R?/ P. I. ?-know- HAB ‘we used to know’

さらに、ルワ語、シハ語およびマシャミ語では、音調だけが異なる形式が未来時制を標示する。⁽²²⁾

(22) 少なくともルワ語においては、FUT *-áa* に対し HAB *-áá* が同一のスロットに位置し、かつ対立的に機能していることから、共時的には別形式と解釈すべきである。

(20) FUT

a. Rwa. (WK)	<i>ti-lóli-áa</i> 1p-見る-FUT 「私たちは見るだろう」
b. Mas. (WK, [Rug : 29])	<i>n-lú-mány-aa</i> PROC-1p-know-FUT ‘we will know’

一方で同じく WK に分類されるキボシヨ語は、同形式 *-aa* が進行相を標示するようである。そして未来時制は *V-/-a* という組み合わせで標示されるようであるが、TAM *V-* (SM の母音のコピー, [Kag : 829]) は他の資料には見出されない。

(21) CONT

a. Kib (WK, [Kag : 829])	<i>ŋ-lu-u-som-aa</i> PROC-1p-V?-読む-CONT 「私たちは読む～私たちは読んでいる」 cf. <i>ŋ-lu-u-ch-a</i> PROC-1p-V?-着く-F 「私たちは着くだろう (未来)」
b. Kib (WK, [Kag : 829])	<i>ŋ-lu-e-som-aa</i> PROC-1p-P. I. ?-読む-CONT 「私たちは読んでいた」

これらデータ、および 3.3.3 で扱った *ke-*、さらには 3.3.4 で扱った *ci-* については、KB 諸言語間で連鎖的な対応関係が認められる。この現象から導出される仮説については 4.1 で詳述することとする。

3.4.2 *-ie*

バンツー祖語段階で完了相を標示していたとされる **-ide* の対応形 (Meeussen 1967 : 110, Nurse 2008 : 264) は、グエノ語 (22 a) で過去一般 (“general past”, 3 段階の過去時制すべてに関与, cf. [Nur : 82]) を表す。一方で [Nur : 78] に

よれば、ヴンジョ語 (22 b) における *-ie* は、(本来の標示概念である) 完了相を表すとしている。しかし [Mos] の解釈によれば、ヴンジョ語における同形式は、その標示概念にかなり状態性を帯びるものとみているようである (cf. “STATIVE marker” in [Mos : 140])⁽²³⁾。

(22) *-ie* < **-ide* (ANT, cf. Nurse 2008 : 264), PST/ STAT/ PERF

a. Gwe. (Gweno, [P&N:19-20])	<i>a-(∅)-yend-íé</i>	<i>i-yeŋwá</i>	<i>mriŋga</i>
	3s-PST. N-go-PST	to-drink	water
	‘he has gone to drink water’		
	cf. <i>ni-íé-yend-ie</i>		
	1s-PST. R-go-PST		
	‘I went’		
b. Vun. (CK, [Mos:137-139])	<i>Wakyèkü-yé</i>	<i>n-á-lè-ě</i>	
	2: old lady-POSS	PROC-1: SU-sleep-ANT	
	‘His/her grandmother is sleeping [right now].’		
	cf.-1 <i>Wándú</i>	<i>!wá</i>	<i>wá-zrém-íe</i>
	2: people these	2: su-farm-ANT	
	‘These people have farmed’		
	cf.-2 <i>Wakyèku wá</i>	<i>wá-c-íě</i>	
	2: old lady these	2: SU-come-ANT	
	‘These old ladies came/ arrived [and are here now].’		

WK における *-ie* の標示概念は、ヴンジョ語に関する [Mos] の解釈に近いものがある。すなわち、接合する動詞語幹のアクチオンスアルトに関わらず、かなり強い状態性を示しており (23 a-b)、その点で ([Mos] における意味での) stativity がより強い形で表出していると解釈される。

(23) ヴンジョ語における *ie-* の標示概念について、[Nur] および Nurse (2008) は、一貫して「ANT という文法概念自体が、すでに状態性を含んだものである (状態動詞に接合する場合)」とする立場に立っているようである。したがって、[Mos] と [Nur] 間に見られる (一見したところの) 意味解釈上の不一致は本質的な問題ではなく、記述者側の terminology の問題と見做して差し支えなからう。ANT と STAT の、概念的また形式的連鎖対応については、4.2 で論ずる。

(23) *-ie* < **-ide* (ANTERIOR, cf. Nurse 2008 : 264), STAT

a. Rwa. (WK)	<i>va-tisiR-íé</i> 3p-書く-STAT 「彼らは書いてしまっている / (何かが) 書いてある」 Sw) “Ameandika halafu maandishi yake yamebaki” cf. <i>va-i-tisiR-íé-e</i> 3p-P. I-書く-STAT-VC 「彼らは書いてしまっていた / (何かが) 書いてあった」
-----------------	---

b. Mas. (WK, [Rug : 33])	<i>ni-bha-salal-i-e</i> PROC-3p-stand-PERFECTIVE-F ‘they are standing/ wamesimama’ cf. <i>ni-bha-lw-i-e</i> PROC-3p-be sick-F ‘they are sick/ wanaumwa, ni wagonjwa’
-----------------------------	---

こういった *-ie* が標示する明らかな状態性は、形式的特性としても反映されている。すなわち、*-ie* を接合する動詞形式は、存在詞、コピュラなど形式的に一般動詞と異なる状態動詞と並行的な時制標示を受けるのである (cf. 以下 3.4.3 (24))。このことからルワ語における *-ie* は、動詞語幹自体を状態動詞化する形式であると分析される (cf. 品川 2008)。したがって、ヴンジョ語等における相標示マーカーとしての *-ie* とは、文法的なステータスが本質的に異なると解釈されるわけであるが、このような相違を生じせしめた歴史的なプロセスについては、第二 TAM *m- / maa-* との連鎖的対応関係を踏まえつつ 4.2 で詳述することとする。

3.4.3 *-VC*

現状において後末尾辞の存在を確認しているのは、ルワ語とシハ語にのみである。後末尾辞は末尾辞のコピー母音 (VC) として実現する。これは、ルワ語においては、一般動詞とは形態統語論的な性質が異なる状態動詞における過

(24) 例えば (24 a) の存在詞 (existential) は末尾辞 *-a* を取らないし、同様のことは (不規則) 状態動詞にも該当する特性である (cf. 品川 2008)。

去時制標示の一部として現れる (24 a)。上述の、*-ie* が状態動詞化のマーカであるとして分析した根拠は、(24 b) と (24 a) の形式的平行性に求められる。一方、シハ語における *-VC* は、近過去よりも「一段古い過去」=中過去を標示する形式として用いられている (24 c)。

(24)

a.	Rwa. (WK)	<i>ni-i-ifo-o</i> 1s-P. I. -exist-VC 「私はここにいた」 cf. <i>ni-ifo</i> <i>íya</i> 1s-exist here 「私はここにいる」	<i>iyá</i> here
b.	Rwa (WK)	<i>va-i-salal-ié-e</i> 3p-P. I-stand-STAT-VC 「彼らは立っていた (立っている状態であった)」 cf. <i>va-salal-ié</i> 3p-stand-STAT 「彼らは立っている (状態である)」	
c.	Sih. (WK)	<i>va-le-fafú'n-á-a</i> 3p-N. PST-咀嚼する-F-VC 「彼らは咀嚼した (中過去)」 cf. <i>va-le-fafún-a</i> 3p-N. PST-咀嚼する-F 「彼らは咀嚼した (近過去)」	

²⁵⁾ *-VC* 接尾辞は、Nurse (2008 : 81-85, 274-275) によれば、バンツー諸語域全域からサンプリングした 100 言語のうちの 8 言語のみに認められる形式で

(25) 屈折接尾辞群において、形式的にその不在が許容されないスロットは末尾辞のみである。-VC はそれに後続した形でのみ生じるわけであるから、そこに後倚辞 (PROC) 的な性質が認められうるかもしれない。あるいは、少なくともルワ語において、第一 TAM *i-* と義務的に共起する (一部表面的な例外あり) ことを重視すれば、これを一種の接周辞 (circumfix) と解釈すべきかもしれない。いずれにせよ、ここでは VC の厳密な形態論的なステータスについては保留し、便宜的に接尾辞と呼んでおく。

あって、またその分布もかなり散発的であり、KB と地理的にもまた系統的にも有意に近親な関係にある諸言語（Guthrie 分類における E Zone）には、それを有する言語は見当たらない⁽²⁶⁾。ただし、ルワ語（およびシハ語？）においては状態動詞の活用パラダイムを構成する屈折接尾辞として体系的に用いられており、またこの形式が近隣の KB との間の体系的なズレを引き起こす契機になっていると考えられる（cf. 品川 2008, Shinagawa 2009）ことも踏まえれば、興味深い現象である。また、上記 8 言語における -VC 接尾辞の標示概念は、近過去時制ないし完了相であるという。つまり、ルワ語およびシハ語におけるそれと「概念的には」関連することになる点も指摘しておく必要がある。

4 仮説的見取り図としての体系的対応

以上概観したデータをリストの形で示せば次のようになる。無論、現状で把握している範囲に限定したものであるし、また調査、分析が行き届いていない部分も少なくないため、あくまで暫定的なものである。

(26) The alternation of *-a* and vowel copy suffix occurs in G 43-44, H 20, K 10-30, L 10-23-62, M 62, R 20-30-40 (Nurse 2008 : 274)。ただ、これも厳密には「末尾辞 *-a* と交替する」VC であって、ルワ語やシハ語にみられるそれとは形式特徴が異なる。また Roberts-Kohn (2005) によれば、ケニア中部に話されるキクユーカンバ語群 (E 50) に、それに類すると思われる形式が見出されるが、何らかの直接的な対応関係を見出すのは困難である。

表 2 : TA マーカーとその表示概念の対応 (概略)

		WK				CK	Gwe.
		Rwa.	Sih.	Mas.	Kib.	Vun.	
primary Ms	a_1-	PST. N	PST. N	PST. N	PST. N	PST. N	PRS / FUT. N
	a_2-	PST. R					CONT (<i>N-SM-a</i>)
	$e-$	—	P. I.	PST. R?, P. I. ?	P. I.	FUT. R	—
	$le-$	PST. M	PST. M +PST. R	PST. M	PST. R	PST. R	PST. R
(intermediate?)	(<i>l</i>) $i-$	P. I.	CONT	—	—	CONT / FUT. N	—
	$\beta e-$	—	—	—	—	—	PST.M??
	$we-$	—	—	—	—	P. I.?	—
	(<i>SM-</i>) $V-$	—	—	—	FUT	—	—
	$\gamma e-$	—	—	—	—	—	PST. M? PST. PERF? FUT. N(<i>a-ghe-</i>)
secondary Ms	$ci-$	—	—	—	—	FUT. N	HAB
	$ke-$	CONT	—	CONT	—	HAB	CONT (analytic!)
	(<i>ker-</i>) $i-$	—	—	—	—	CONT	—
	$ce-$	INT \uparrow	—	—	—	INT \uparrow	FUT. R
	$nde-$	INT \downarrow	—	—	—	INT \downarrow	—
	$m-$	PERF	PERF	PERF	—	COMP	PERF (<i>mi-</i>)
$maa-$	COMP	COMP (analytic)	COMP (analytic)	—	—	—	
Suffixes	$-ile / -ire$	STAT	STAT	STAT	—	PERF / STAT	PST
	$-ag$	FUT / HAB	FUT / HAB	FUT / HAB	CONT	—	—
	$-V$	P. I.	FAR. PST?	—	—	—	—

以下では、本稿でとくに焦点を当てた TAM の 2 つの系列、すなわち FUT-HAB-CONT 系および STAT-ANT-COMP 系について、通時的なダイナミズムに踏み込んだ形で議論を展開する。

4.1 FUT-HAB-CONT 系

KB 諸語において未来時制 (FUT), 進行相 (CONT), 習慣相 (HAB) を標示する形式の対応関係は, 次のようにまとめることができる。部分相過去形式 (P. I.) とともに表 3 に示す。

表 3 : FUT-HAB-CONT 系

	WK				CK	Gwe.
	Rwa.	Mas.	Sih.	Kib.	Vun.	
FUT	-aa	-aa	-aa	(SM-) V-	ci-	a-t/fe- / a-ye-
HAB	-aa	-aa	-aa	?	ke-	tʃi-
CONT	kée-	ke-	li-	-aa	i-	a- / kya- / ke + Verb
P. I.	i-	e-?	e-?	?	we-	?

4.1.1 WK

まず, パンツー祖語 **-ag* の対応形と想定される *-aa* は, ルワ語, マシャミ語, およびシハ語で FUT / HAB, キボシヨ語で CONT を標示する。このとき, 文法化の一般的傾向を鑑みれば CONT→HAB という概念変化の蓋然性は十分に認められる一方で (cf. Bybee et al. 1994 : 158, etc), その逆のプロセスは考えづらい。これに従えば, キボシヨ語における *-aa* がより本来的な用法を継承しているということになり, FUT / HAB を示す 3 言語においては何らかの形で *-aa* に概念変化が生じたものと見做されることになる。では, その変化とはどのようなものであったのか。表 3 に示した連鎖的な対応関係から示唆されるのは, ルワ語およびマシャミ語においては, *ke(e)-* の成立 (機能形式化) がその引き金になったということである。明らかに文法化の度合いが浅いこの形式 (cf. 3.3.3) が, 本来 *-aa* が占めていた CONT の領域に入り込むことによって, *-aa* が (本来の標示アスペクト領域から) 押し出され, 結果としてその領域を HAB へと移行させたと解釈されるわけである (cf. Haspelmath 1998)。シハ語においては, その役割を *li-* が担ったということになろうが, これはヴンジョ

語における対応形式 *-i* が CONT を標示することからも、推論としての一定の妥当性が認められよう (HAB と FUT の分化のより詳細なプロセスについては、Shinagawa 2008, 2009 を参照)。

4.1.2 CK

一方 **-ag* の対応形を何らかの理由⁽²⁷⁾で継承しなかったヴンジョ語の現行体系はどのように説明されるか。(2 a-b) に示した文法化理論が示す一般傾向に従えば、*ke-* は、HAB としてではなく、CONT として文法化されたものと想定すべきであろう。そうすると、ヴンジョ語においては *ke-* が CONT→HAB へと、その標示概念を変化させたと解釈することになるが、このプロセス自体は上述の WK 諸語に認められるそれと平行的ということになる。このことは、本来そのアスペクト領域をカバーしていた *-aa* が継承されなかったという事実を背景とするものであろうが、このことだけでは、*ke-* 自体が標示領域を移行させるための十分条件とはならない。つまり *aa-* の不在のみでは、*ke-* が CONT 領域に留まり続けるといういまひとつの可能性を論理的に否定することはできない。*ke-* の移行を積極的に推し進めた要因は現在のところ判然としないが、(*ke-* とは異なる) コピュラ形式に由来する *i-* (**li-*) の侵入をその要因とする見方は一定の妥当性を有すると考えられる (cf. シハ語との平行性)。また、ルウ語における対応形を鑑みれば、同形式が P. I. を経由して CONT へと文法化していったという可能性も残るが、この妥当性の検証については今後の実証的な研究を待たなくてはならない。

4.1.3 FUT の *ci-*

ヴンジョ語のアスペクト体系については、もう 1 点重要な問題がある。すなわち、FUT の *ci-* についてである。3.3.4 に示したとおり、少なくとも CK に

(27) これについては、現在の調査状況および先行資料からは断定的なことは言えない。例えば、pre-pausal 位置における長母音回避などの音韻的な制約が関わっていた可能性などが考えられるが、確定的な要因は明らかになっていない。

において、この形式が安定的に未来時制を標示することはよく知られており (cf. [Nur : 76]), この事実のみから判断すれば、*ci-* が直接的に FUT 標示形式として文法化されたとする解釈に何ら不自然な点はない。しかしながら、WK をも含めた射程からこの現象を観察したとき、それとは異なるプロセスの妥当性が示唆される。すなわち、*ci-* は本来的には HAB 領域をカバーするものであって、それが *ke-* の標示アスペクト領域の移行に伴う体系的な力学によって HAB → FUT へと連動的に移行したというプロセスである (Shinagawa 2009)。3.3.4 で既述のとおり、HAB の語彙的源泉 (lexical source) として 'know' に相当する語彙形式が通言語的に認められることは、昨今の文法化研究が明らかにするところである (cf. Bybee [1994 : 15], Heine and Kuteva [2002 : 278])。そしてこの通言語的な傾向性は、KB 諸語に見られる言語事実に鑑みてもその妥当性が確認される。すなわち、3.3.4 (18 b) にあげたグェノ語における対応形式 *tʃi-* が HAB を標示するという事実である。以上より、ここでは、Shinagawa (2009) で示唆した、CK における *ke-* : *CONT → HAB, *ci-* : *HAB → FUT という玉突き的な変化の妥当性が、実証的に裏付けられるものであることを確認しておく。

4.2 STAT-ANT-COMP 系

一方、状態相 (STAT), 完了相 (ANT), 完成相 (COMP) に対応する諸形式は次のようにまとめることができる。過去時制諸形 (PST) とともに表 4 に示す。

表 4 : STAT-ANT-COMP 系

	WK				CK	Gwe.
	Rwa.	Mas.	Sih.	Kib.	Vun.	
PST. R	<i>á-</i>	<i>e-</i>	<i>á-</i>	<i>le-</i>	<i>le-</i>	<i>le-</i> (-ie)
PST. M	<i>Nde-</i>	<i>le-</i>	<i>le-</i> (-VC)	<i>a-</i>	<i>a-</i>	<i>βe-</i> (-ie) / <i>ye-</i> (-ie)
PST. N	<i>a-</i>	<i>a-</i>	<i>le-</i>			<i>Ø-</i> (-ie)
STAT	<i>-ie</i>	<i>-ie</i>	<i>-i</i>	?		?
ANT	<i>M'-</i>	<i>m-</i>	<i>m(e)-</i>	?	<i>-ie</i>	PST. N / <i>nde-</i> (mi-)
COMP	<i>M'-maa-</i>	<i>m-maa + INF</i>	<i>m-maa + INF</i>	?	<i>m-</i>	?

4.2.1 *-ie* の体系的な位置づけの対照

3.4.2 で言及したように、*-ie* の本来的な標示概念は ANT であったと考えられている。そして、[Nur] の指摘に従えば、ヴンジョ語ではその本来的な機能がそのまま継承されているということになる（ただし同じヴンジョ語に関して、[Mos] によれば、それはかなり状態性を帯びた概念として捉えられている。cf. 3.4.2）。それに対して、ルワ語およびマシャミ語においては、その標示概念により以上の状態性が認められ、かつ少なくともルワ語においては *-ie* を接合した動詞が、形式としても「状態動詞化」していることを示した(3.4.2, 3.4.3)。すなわち両言語において *-ie* は、ANT とは異なるアスペクト領域としての STAT を標示する形式へと移行していると解釈される。そして、この移行によって生じた体系上の空き間 (gap) に *m-* が侵入する形で、(ヴンジョ語に見られるような) 本来の COMP から ANT へと標示概念を連動的に移行したと見做すわけである。したがって、ここで想定される体系的変化のプロセスは、4.1 で見た *ke- >> -aa* (WK) ないし *ke- >> ci-* (CK) におけるような (*ke-* の侵入を引き金とした) 「押しの連鎖 (push chain)」ではなく、*ie-* 自体の標示アスペクト領域の移行に起因する「引きの連鎖 (pull chain)」が生じたと見るわけである。

4.2.2 「引きの連鎖」の傍証：**-mad-*由来の2つの TAM の并存

ここで「引きの連鎖」というプロセスを推定することの妥当性は、ルワ語、マシャミ語、シハ語において COMP の標示に **-mad-* 「終える」に由来する *maa* が関与するという事実から、傍証的に確認される。3.3.2 で示したとおり、ヴンジョにおける COMP, WK における ANT, すなわち *maa* に隣接するアスペクト領域を標示する *m-* もまた、**-mad-* に語彙的由来を持つ形式である。このとき、もしそこに「押しの連鎖」による文法変化を仮定するとしたら、明らかに不自然、ないし不経済なプロセスを想定することになる。なぜならば、*m-* が *maa* と同語源であることは、話者の共時的な言語知識として共有されており、⁽²⁸⁾ 基本概念がほぼ等価である *m-* をわざわざ *maa-* に置き換える必然性が認

められないためである。そしてより重要なことは、仮に *m-* が *maa-* に置き換えられるという事態が生じたとしても、両者が「並存」しなくてはいけない体系的な理由を措定しえないためである。つまり、共通の語彙項目から派生したことが明らかな2つの機能形式が並存するという（一見すると）不経済な体系が成立するためには、そうせざるを得ない（外在的な）環境要因が求められてしかるべきである。その要因とは、TA 体系を構成する他の要素の標示アスペクト領域の移動による体系上の *gap* の存在であり、その *gap* は「引きの連鎖」のプロセスによってはじめて与えられるものである。

4.2.3 なぜ *-ie* が STAT 化できたか

以上のように、STAT-ANT-COMP 系列における TAM の概念変化には、「引きの連鎖」のプロセスが関与していることが推定されるが、このプロセスが可能であるためには、*-ie* がその標示領域を「主体的に」移動させたということが前提になっている必要がある。つまり、*-ie* が STAT 化するという変化については、体系的連鎖とは別個の要因によって説明されなくてはならない。結論を先取りして言えば、その要因とは、一般動詞の活用体系に対する「状態活用 (cf. 3.4.2, 3.4.3)」の存在に求められるとみられる。

まず、バンツール諸語一般における *-ie* の概念変化の方向性について Nurse (2003 b) は概ね次のようなことを述べている；

(25)

バンツール祖語 **-jde* の対応形は、多くの言語において本来の標示概念である ANT あるいは PST のマーカーとして用いられている。⁽²⁹⁾ ANT は、その定義上また言語事実からも、PST へと移行するか、あるいは STAT へと移

(28) このことは、筆者も現地調査中に得られた協力者の説明から何度となく確認しているところである。同様のことを、[Nur : 71] は次のように述べている；It is remarkable, at least to this writer, that many Chaga speakers can segment these complex TA markers with apparent ease and identify the underlying auxiliary verbs.

(29) 表4のグエノ語を参照。

行するかという2つの変化の方向性をとることが明らかになっている。このとき後者、つまり[WKにおけるような]ANT→STATのような変化は、バンツー諸語においては極めて少ない数の言語においてのみ認められるものである。したがって、ある言語においてそのような変化が見られたとしても、それはごく少数の状態動詞 (stative verbs) との結びつきに限定され、やがて生産的には用いられなくなっていくであろう (例えばショナ語 S 10, イエイ語 R 40, あるいはいくつかのチャガ諸方言 E 60におけるように)。

(Nurse 2003 b : 96 抄訳, 下線筆者)⁽³⁰⁾

つまり、*-ie* が STAT として機能すること自体がバンツー諸語一般に稀であって、(25)に述べられているように「いくつかのチャガ諸方言」(=ヴンジョ語を含む CK を指すものと考えられる)における *-ie* の「状態性」の意味も、もはや文法的に生産的なものとしては見做されてはいない。では、WK において、なぜ *-ie* の STAT 化が可能になったのか。それを可能せしめたのが、状態活用の存在である。3.4.2, 3.4.3 で示した状態活用は、現在時制が形式的に無標であるのに対し、PST を第一 TAM *i-* と後末尾辞の-VC で標示する活用形式である (cf. 3.4.3 (24 a-b))。これは、PST を第一 TAM *a-* ないし *le-/nde-* で標示する一般動詞の時制標示活用 (cf. 3.2) とは形式的に対照的である。そ

(30) All languages examined seem to have an ANT, or a past which doubles as an ANT. It is primarily expressed by reflexes of the Proto-Bantu final **-ide* ([-ile, -ele, -ire, -ie] etc.), which suggests this is a category with a long Bantu history. From the definition and the facts it becomes clear that ANT easily shades over into past, or into stative [= STAT]. ... Many languages have reflexes of **-ide* associated with some form of past. On the other hand ... There are many fewer examples of languages which have gone or are going in this direction [= to STAT] and there is then a possibility that it will become completely associated with a small set of stative verbs ('lie, sleep, sit, be, stand, know') and will be no longer productive (e. g. in Shona S 10, Yeyi R 40, some dialects of Chaga E 60)。ここにおいて、Nurse(2003 b)は、ヴンジョ語の *-ie* に一定の「状態性」を見出していることが示されているが、一方でそれはあくまでも grammatically unproductive なものと見ていることも明らかである。筆者の主張は、WK は (ヴンジョ語とは異なり) *-ie* が STAT として productive である、ということである。

してこの活用体系は、通バンツールの一般的であるとはいえないものであるうえに、KB 諸語のなかでは（確認しうる範囲では）WK にしか認められていないのである（cf. 品川 2008）。

(25)に述べられているとおり、ANT が STAT へと変化するという概念変化の方向性自体は何ら不自然なものではない。この概念的な連関に加えて、一般動詞の時制活用とは対立的な状態動詞専用の活用テンプレートが存在することによって、*-ie* が「一般動詞語幹を（従うべき活用体系の異なる）状態動詞へと転換する」という独自の形態統語論的機能を得たと解釈できるわけである。そしてこの形態統語論的機能を標示概念として換言すれば、すなわち状態性の標示=STAT ということになるわけである。定義上は可能だがバンツール諸語一般の TA 体系では極めて稀である *-ie* の ANT→STAT という概念変化は、同様にバンツール諸語では類例をほとんど見ない「一般動詞活用」対「状態活用」という 2 つの対立的な時制活用テンプレートの存在を環境要因として成立したものと推定されるわけである。

5 結

本稿でその一端を提示した、KB における TA 体系変化のダイナミズムを実証的に捉えるという研究には、未だ多くの課題が残されている。そしてその根本にあるものは、現時点で十分に記述されている言語に限られており、また得られているデータも（表 2 に示したとおり）未だ雑駁なものであるという資料面での問題である。したがって対象言語を拡張しつつ資料的空白を補完すること、そしてより網羅的かつ系統だった記述資料ならびにその分析を提示することが、今後の喫緊の研究課題ということになる。

本稿は、そのような現状において可能な限り広範なデータに基づいた作業仮説構築の試みである。CONT-HAB-FUT にかかる *ke->-aa*、また *ke->ci-* の押し連鎖の仮説（4.1）、STAT-ANT-COMP 系における *-ie* の STAT 化を引き金とした引き連鎖の仮説は、今後の KB 広域的な調査によって検証されることになる。このような形で、実証的な記述、分析をとおして明らかになることが期

待される KB の包括的な TA 変化のダイナミズムが、バンツー諸語一般における TA 研究に対する実証的な貢献となることを望むものである。

略号一覧

時制および相 (TA) 概念	動詞構造	言語名
PST 過去時制	PROC 前倚辞	WK 西キリマンジャロ諸語
PRS 現在時制	ENC 後倚辞	Rwa. ルワ語
FUT 未来時制	SM (SU) 主語一致接辞	Sih. シハ語
-.N, -.M, -.R 近-, 中-, 遠-(時制)	TAM TA マーカー	Mas. マシヤミ語
INT ↑ 高意図性	(CTM 複合 TA マーカー)	Kib. キボシヨ語
INT ↓ 低意図性	OM 目的語一致接辞	CK 中央キリマンジャロ諸語
PFV 全体相	PreF 前末尾辞	Vun. ヴンジョ語
IPFV 部分相	F 末尾辞	Gwe. グェノ語
P. I. 部分相過去	PosF 後末尾辞	
ANT = PERF 完了相	VC コピー母音	
COMP 完結相	COP コピュラ	
CONS 継起相	INF 不定詞	
CONT 進行相	1s, 2p etc. 人称+数	
HAB 習慣相	1, 2, 3 etc. 名詞クラス番号	
STAT 状態性/状態動詞化	(数字のみ)	
IND 直説法		
SUBJ 接続法		

参 照 文 献

- Bybee, J. L., W. Pagliuca, and R. D. Perkins. 1991. "Back to the Future" In : Traugott, E. C. and B. Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*, Volume 2, pp. 17-58, John Benjamins
- Bybee, J. L., R. Perkins, W. Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar*, The University of Chicago Press
- Comrie, B. 1976. *Aspect*, OUP
- Coupez, A., Y. Bastin and E. Mumba, 1998. *Bantu Lexical Reconstructions 2*, Musée royale de l'Afrique centrale, Tervuren

- Dahl, Ö. 1985. *Tense and Aspect Systems*, Basil Blackwell
- Emanatian, M. 1992. "Chagga 'come' and 'go': Metaphor and the development of tense-aspect"
In: *Studies in Language*, 16-1, pp. 1-33, John Benjamins
- Grégoire, C. 2003. "The Bantu languages of the Forest" In: Nurse, D. and G Philippon (eds.)
The Bantu Languages, Routledge
- Guthrie, M. 1971. *Comparative Bantu (vol. 3)*, Gregg Press
- Heine, B. and T. Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*, CUP
- Heine, B. and B. Reh. 1984. *Grammaticalization and Reanalysis in African Languages*, Helmut
Buske Verlag
- Haspelmath, M. 1998. "The semantic development of old presents: new futures and subjunctives
without grammaticalization" In: *Diachronica* XV (1) pp. 29-62
- Lojenga, C. K. 2003. "Bila (D 32)" / in / Nurse, D. and G Philippon (eds.) *The Bantu Languages*,
Routledge
- Meeussen, A. E. 1967. "Bantu Grammatical Reconstructions" In: *Africana Linguistica* III, pp. 79-
122, Tervuren
- Moshi, L. 1994. "Time reference markers in KiVunjo-Chaga" In: *Journal of African Languages
and Linguistics* 15, pp. 127-159, Walter de Gruyter
- Nurse, D. 1981. "Chaga / Taita" In: Hinnebusch, Thomas H. (ed.) *Studies in the Classification of
Eastern Bantu Languages*, pp. 127-161, Helmut Buske Verlag
- 2003 a. "Tense and Aspect in Chaga" In: *Annual Publication in African Linguistics* 1,
pp. 69-90
- 2003 b. "Aspects and Tense in Bantu Languages" In: Nurse, D. and G. Philippon
(eds.) *The Bantu Languages*. Routledge. pp. 91-102
- 2007. "The Emergence of Tense in Early Bantu" In: D. Payne and J. Peña (eds.)
Selected Proceedings of the 37th Annual Conference on African Linguistics, Cascadilla
Proceedings Project
- 2008. *Tense and Aspect in Bantu*, OUP
- Philippon, G. and M-L. Montlahuc. 2003. "Kilimanjaro Bantu (E 60 and E 74)" In: Nurse, D.
and G. Philippon (eds.) *The Bantu Languages*. Routledge. pp. 475-500
- Philippon, G and D. Nurse. 2000. "Gweno, a little known language of Northern Tanzania", In:
Kulikoyela K. Kahigi, Yared M. Kihore and Maarten Mous (eds.) *Lugha za Tanzania /
Languages of Tanzania*, CNWS Publications.
- Plungian, V and A. U. Urmanchieva. 2007. "Verbal forms with suffix -ag in Bantu: beyond
imperfective", Paper read at the 1st International Conference on Bantu languages, Gothenburg,
Sweden
- Raum, J. 1964 / 1909. *Versuch einer Grammatik der Dschaggasprache (Moschi-Dialekt)*, Gregg
Press

- Roberts-Kohno, R. R. 2005. *Aspects of Kikamba Phonology: Syllabification and Tone-Syntax Interface (ILCAA Language Monograph Series 2)*, ILCAA
- Rose, S., C. Beaudoin-Liez, D. Nurse, 2002. *A Glossary of terms for Bantu verbal categories: With special emphasis on tense and aspect*, Lincom Europa
- Rugemalira, J. and B. Phaniel. 2009. "A Grammatical Sketch of Kimashami", MS
- Shinagawa, D. 2008. "Rare story of the emergence of the Future?: A hypothesis on the historical development of Proto-Bantu *-ag in Rwa (Bantu, E 61)", *HERSETEC: Journal of Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration*, Graduate School of Letters, Nagoya University, Vol. 2 (1), pp. 137-150
- . 2009. "Historical split of *-ag-a in Rwa (Meru, E 61)", Paper read at the 3rd International Conference on Bantu Languages, Royal Museum for Central Africa, Tervuren, Belgium
- Yukawa, Y. 1989. "A Tonological Study of Machame Verbs" In: Yukawa, Y. (ed.) *Studies in Tanzanian Languages*, pp. 223-338, ILCAA
- 加賀谷良平, 1989. 「チャガ語」, 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一 (編著) 『言語学大辞典【第2巻】』, pp. 826-831, 三省堂
- 品川大輔, 2008. 『ルワ語 (Bantu, E 61) 動詞形態論: 記述言語学的研究』学位申請論文, 名古屋大学, 450 pp
- . 2009. 「キリマンジャロ・バンツウ諸語における TA マーカーの分布と対応—今後の (横断的) 調査に向けて—」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究プロジェクト「言語接触と系統継承: 大湖地域から南部アフリカにかけて話されているバンツウ諸語と隣接言語の記述研究」研究会 (2009年11月14日) MS

付: 「語彙統計をもとにした」KBの(想定)系統図
(source: Nurse 1981)

